

「分断」ではなく「共生」の時代を構築するための提言

～アルフレッド・アドラーの「共同体感覚」の含意からの学びをヒントに～

地球環境学者 古 屋 力¹

「人は自らの運命の建築家である (Man ist seines Glückes Schmied.)」 (Alfred Adler)

1. 分断の時代における「共同体感覚」の含意

現下の気候危機問題や平和構築問題の解決への道に立ちただかっているのは、「分断」である。

このちいさな「地球」と言うかけがえのない一個の青い惑星上で共に生きている 81.42 億人もの人類の 1 人 1 人の心に徐々に忍び寄りつつある「分断」という忌まわしき病いをいかに根治するかが、喫緊の課題である。これなくして、気候危機問題や平和構築問題の解決は、不可能である。

人々が「怒り」「悲しみ」「不安」「シャーデンフロイデ (Schadenfreude)」²「攻撃」といった劣情ではなく、「喜び」や「思いやり」をもって、穏やかな「利他」「包摂」「協調」「信頼」「誠実」の心で、明るい未来志向的な「共生社会」を構築することができるかが、気候危機や平和構築問題の解決の「糸口」になる。

はたして、この気候危機問題や平和構築問題の解決の「糸口」は、どこにあるのであろうか。

この本源的な問いに対して、1 つのヒントとして、かのオーストリアの精神科医アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) ³の「共同体感覚 (Gemeinschaftsgefühl)」の含意は、実に唆に富んでいる。

「共同体感覚」とは、他者を仲間だと見なし、そこに「自分の居場所がある」と感じられることである。「人間は皆互いを支え合う仲間である」という感覚である。

アルフレッド・アドラーの「共同体感覚」とは、自分一人の存在ではなく、家族、地域、学校、職場などの大きな共同体の一員であるという感覚である。他者とのつながりの中で幸福を感じるための基盤となる概念である。

¹ 東京大学 未来ビジョン研究センター 客員研究員。東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部 元教授 (気候変動・地球環境専攻)。国際通貨研究所 元シニアエコノミスト (国際金融・国際通貨専攻)。本稿記載内容は、すべて現時点の公開情報に基づくものであり、その見解は、所属組織を代表するものではなく、古屋力個人の意見である。

² 「シャーデンフロイデ (Schadenfreude)」とは、他者が不幸、悲しみ、苦しみ、失敗に見舞われたと見聞きした時に生じる、喜び、嬉しさといった快い感情。生後 24 か月の幼児にも見られ、不公平嫌悪を確立する重要な社会的感情であるとされる。過去の事例から、相手への攻撃性、競争心、自分自身が定義した正義から来るものとする説もある。

³ アルフレッド・アドラー (Alfred Adler) は、オーストリアの精神科医、精神分析学者、心理学者。ジークムント・フロイトおよびカール・グスタフ・ユングと並んで現代のパーソナリティ理論や心理療法を確立した 1 人。アドラーはフロイトの共同研究者であったが、1911 年にはフロイトのグループとは完全に決別し、「アドラー心理学 (個人心理学)」を創始した。

2. 「共同体感覚」とは何か

心理学分野については、まったくの門外漢ではあるが、一介の地球環境学者として、この「共同体感覚」に、気候危機問題等の地球環境問題を解く鍵があるような気がしている。

いま、鎌倉図書館からアルフレッド・アドラーの『人間を考える』⁴を借りてきて読んでいる。原書『Menschenkenntnis』は、1世紀近く前の1931年に世に出た本である。

この本を読みながら、特に心に響いたのは、第2章の「共同体感覚」の記述であった。

人間の心の問題を解く鍵は、幼年時代のごく初期にある。幼年時代にその人の心のひな形、行動指針、目標が形成され、大人になっても継続される。幼年時代の記憶を訊けば、その人がどんな種類の人間か、正確なイメージを得ることができる。性格は先天的なものではなく、幼年時代から世界に適応するために周囲に対処し、行動指針を形成することで得られる、後天的なものである。

誰しものが、他者に手を差し伸べる課題を持ち、他者と繋がっているとを感じる。かくして、大きくさまざまなつながりができる。生きる上でのさまざまな結びつきが、人間を分断させずに、結束させる。一人ではなく社会で生きる人間は「共同体感覚」を持っている。

この「共同体感覚」は、「心の器官」が作り出したものであり、信頼、誠実、率直、心理への愛に通じる。「共同体感覚」によって人間社会のルールを守るとは、人間の理想像である。

「共同体感覚」は、その人がどのような環境に置かれ、周囲の人とどのような関係を築いたかによって、どのような性格が形成されるかが決まる。

今日、私たちの多くは孤立して生きている。そのため、みなたいして人間を知らない。人間知を発展させるには、人と親密に関わらなければならないのに、家族の中でさえ、理解しあえずにいる。しかし、人々の心には、「共同体感覚」の萌芽がもれなく生きている。「共同体感覚」を共有でき、人間知がもっと広まれば、私たちは互いに理解を深め、快適な共同生活を営めるようになるだろう。

この「共同体感覚」は、「他者信頼」「自己信頼」「所属感」の三つの要素で構成されている。

自分中心の視点を離れて「他の人の目で見、他の人の耳で聞き、他の人の心で感じる」共感的な態度を意味する。「共同体感覚」を持つことで、自己中心的になるのを防ぎ、生きがいや精神的な健康を得ることができる。「共同体感覚」が発達している人は、自分の利益のためだけに行動するのではなく、自分の行動がより大きな共同体のためにもなるように行動する。なぜなら、人間は社会という網の目の中に組み込まれている（Social embeddedness）からである。

⁴ アルフレッド・アドラー（Alfred Adler）『人間を考える（Menschenkenntnis）』は精神科医・心理学者アドラーの代表作。人間のこころ全般から、社会、子ども、劣等感、男女、性格、情動へと分け入る、アドラー個人心理学の入門書。

3. 「共同体感覚」が欠損し感情が劣化したトランプ時代の闇

「共同体感覚」が未熟な人や、欠損してしまっている人は、感情が劣化しており、自分の行動の結末や他者への影響を念頭にいれず、自分の利益だけしか目に入らないようになる傾向がある。

仮に、みなさんの極端に自分の利益のことだけにしか関心がない人がいるとしよう。その人は自分の利益になる場合にだけ、他人と協力するか他人を利用しようとするだろう。他人が自分を必要とする場合というのは、他人がその人自身の利益になる場合にだけだと考える。かように「共同体感覚」が欠落し、単なる味もそっけもない「損得マシン」に成り下がってしまった人は、多々問題を抱えやすく、不幸な人生を送ることになりやすい。

「共同体感覚」について、アドラーは「共同体感覚は、生まれつき備わった潜在的な可能性で、意識して育成されなければならない」と述べている。それは、ちょうど自転車に乗れるようになる練習と同じことである。自転車に乗れるようになるためには、実際に、自転車に乗って練習しなければならない。最初は、うまく乗れずに転んだりして失敗を繰り返すだろう。しかし、そのようにして練習をしていくうちに、特別に意識することなく自転車に乗れるようになるだろう。

「共同体感覚」を育むということは、「共同体感覚」を机上で考えることではない。自分の行動ひとつひとつについて「こうすることは、自分の利益ばかりでなく、相手のためにもなるだろうか。」「こうすることは、自分と相手の利益になるが、それはもっと大きな共同体にとってはどうだろうか。」と、より大きな共同体のためになる方向を選択することである。日ごろの行動で、自己への執着（self interest）を他者への関心（social interest）に切り替えていくことである。

仮に横暴で、他人の迷惑など顧みず、自分の都合しか考えない暴君のような人物がいたとしよう。世界は自分を中心に回っているのだと考え、権力や腕力に任せて、専制君主のように振る舞う。周囲にとっては、迷惑甚だしい人物である。

ちょうど、シェイクスピア劇のリア王などは典型的な暴君タイプであり、卑近な例でも誰しも顔を思い受かる人物は米国のトランプ大統領であろう。

まあ、リア王やトランプのような典型的な暴君ではなくとも、集団の和を乱すような人物は、我々の近くに大勢いる。自己中心的で、集団行動ができず、単独行動を好む。遅刻をする。約束をすっぱかす。それでも詫びれない。反省すらしない。根拠なき言い訳や無責任極まりない見苦しい責任転嫁をする。こういった自己中心的な自分勝手な人物は、周囲にも結構いる。枚挙に暇はない。

そもそも、「怒り」と「悲しみ」や「不安」といった劣情は、時に人々に共感を引き起こし、人々を結束させるが、これが、人々を分断する情動であることに留意しなければならない。いま、ウクライナでもガザでも、さらには、米国内ですら、こうした「分断する情動」が、人々の心を支配してしまっている。現下の「トランプ現象」の原動力は、こうした「分断する情動」である。

ましてや、他人の不幸や失敗を喜ぶ「シャール・フロイド」の感情は、誰しも大同小異持っている。劣悪な百害あって一利なしの劣情である。かのフランスのモラリスト（思想家）のラ・ロシュフーコー（François VI, duc de La Rochefoucauld）は、「私たちは、いつも、友人の不幸に一種の満足感を味わう（Notre bonheur à jamais nous rend le plaisir.）」と喝破している⁵。

これら「怒り」「悲しみ」「不安」「シャール・フロイド」といった劣情は、人々の「感情の劣化」を加速させ、人と人を調和させず、「共同体感覚」を傷つける。そして世界を「分断」する。

始末に負えないのは、こうした「感情の劣化」を利用する政治家である。人々が抱く分断する情動を梃子に、政敵を攻撃し、自己利益の最大化を図る。あってはならない卑劣な行動である。その典型が、トランプ大統領である。トランプ劇場における「感情の劣化」の諸相と深刻な闇の深淵を、丁寧に観察してみると、以下の通り、描写できる。

<トランプ劇場における「感情の劣化」の諸相と深刻な闇の深淵>

① 分断の固定化と深化

トランプがいま行っている怒りや不安を梃子にする政治は、国民を「敵・味方」に二分し、合意形成や対話を困難にする。結果として民主主義が前提とする「多様性の共存」が損なわれる。

② 理性的議論の劣化

負の情動が優勢になると、事実や合理的根拠よりも「直感的に敵を攻撃する言葉」が人々に響きやすくなる。これがフェイクニュースや陰謀論の温床になる。

③ 短期的支持の獲得と長期的破壊

シャール・フロイド的な政治は「敵が痛めつけられている快感」を支持者に与えるため短期的には熱狂を生むが、持続的な政策改善や社会的信頼の構築を阻害する。

④ 自己利益優先による制度破壊

感情を利用して制度や法規範よりも「強いリーダーの意志」を優先させ、チェック・アンド・バランスを弱体化させる。これは権威主義化の危険な道に直結する。

トランプ大統領の「感情の劣化の政治」は、人々の分断を深化させ、理性的民主主義を損ない、短期的な支持の代償として制度と社会信頼を破壊している。しかも、米国内だけでなく、世界中を不安に陥れ、国際社会における信頼関係を破壊し、戦争と気候危機リスクをさらに加速している。これは、米国民にとっても、世界にとっても、百害あって一利なしの「人的災害」である。

⁵ ラ・ロシュフーコー（François VI, duc de La Rochefoucauld）の『箴言集（Réflexions ou sentences et maximes morales）』にある格言「私たちは、いつも、友人の不幸に一種の満足感を味わう」（Notre bonheur à jamais nous rend le plaisir.）は、人間性の根底にあるエゴイズムと、友情に潜む複雑な感情を描いた有名な一節。この格言は、人は他人の不幸を自分の幸運と結びつけてしまうという人間の本質的な部分に触れている。ラ・ロシュフーコーは17世紀フランスのモラリスト（思想家）で、彼の代表作である『箴言集』（または『考察あるいは教訓的格言・箴言』Réflexions ou sentences et maximes morales）には、人間性の根源にエゴイズムを見るという視点から、約600の格言が収められている。

4. 「分断の時代」における「解法」

それでは、こうした「分断の時代」において、ただ、我々は、手をこまねいて、わが身に火の粉が降り注いでこないことだけを祈って、傍観者として、茫然と立ち尽くすだけなのであろうか。

そんなことはなかろう。希望はある。「分断の時代」における「解法」はたくさんある。

ヒントは、「共同体感覚」にある。

「喜び」や「思いやり」を共有することで、「共同体感覚」が醸成される。「喜び」や「思いやり」は、人々を結びつける。他者を温め、高めようとする温もりである。

本来あるべき政治家は、「喜び」や「思いやり」による「共同体感覚」を丁寧に共有しながら、率先垂範して、直面する困難な課題に果敢に向き合い、成果を確実に生み出す為政者に他ならない。トランプ的レトリックが「分断の物語」を提供するなら、それに対抗する側は「連帯と希望の物語」を提示することが鍵となる。これは抽象的スローガンでは無力である。むしろ、生活の安心やコミュニティ再生に根ざした物語である必要がある。その物語を語れる政治家が、いまの時代、求められている。人類の持続可能で安寧な幸福のためには、「共同体感覚」が必須不可欠な要件となる。我々が選ぶべき政治家には、こうした「共同体感覚」をいかにして実装してゆけるか、その能力と見識が問われている。

「共同体感覚」の実装のためには、重要な要件が幾つかある。それは、主に、以下の4点である。

< 「共同体感覚」の実装のための要件 >

① 感情リテラシー教育の強化

怒りや不安に巻き込まれるのではなく、自分の情動を認識し、批判的に距離を取る力を養う教育を行う環境整備と、そのためのメディアリテラシーと感情教育の融合が重要となる。

② メディア構造の改革

ソーシャルメディアは「怒り」や「攻撃」を拡散しやすいため、アルゴリズムの透明化や、公共的なニュースフィードの強化が求められる。

③ 制度的ガードレールの強化

大統領や政治家が感情操作によって民主的制度を掘り崩すのを防ぐため、司法や選挙制度、独立機関（メディア規制機関や監査機関）の強化が不可欠である。

④ 「共通の敵」を変換する

国内の敵対勢力をスケープゴートにするのではなく、気候危機・パンデミック・経済的不安定性といった「人類共通の課題」こそが真の敵であると再定義することが鍵となる。これにより「怒り」や「不安」の矛先を分断から協働に切り替えることができる。

5. 「共生」の時代を構築するための「共同体感覚」の実装のための提言

以上、諸点勘案、人類全体に「共同体感覚」の実装を図ることが急務であると考え。

いまここに、1つの可能性がある。そのヒントは、気候危機問題にある。「人類共通の課題」であり共通の「真の敵」でもある気候危機問題に対して、人類が、国籍、肌の色、言語、思想信条、宗教の壁を乗り越えて、一致団結して、共闘を組むのである。

そして、もはや、人類同士で不毛な戦争なんかしている余裕はないことを全人類が自覚し、早期合意形成を図り、喫緊の課題となる気候危機問題解決に向けて国際的なインフラ構築に着手することである。そのために、目下各国が費やしている巨額な軍事予算を、すべて、この国際的な気候危機問題解決インフラの構築に一気に傾斜的に投入するのである。不可能ではなかろう。

かくして、「自己中心的な利益追求」から「他者や全体の幸福に貢献する姿勢」へ人類をシフトさせるための「共同体感覚」の実装が、気候危機問題への共闘を組むことを通じて、実現できるかもしれない。この「分断の時代」に、いまこそ、求められている「人類の明るい未来」に繋がる、数少ない可能性である。

我田引水ながら、地球規模の「協働プラットフォーム構想」として、かねてより提言してきた「炭素通貨」と「再生可能エネルギー」を軸とした気候危機問題解決と資本主義問題という2つの難解な連立方程式を解く「東アジア脱炭素共同体構想」⁶は、こうした1つの未来志向的な「人類の明るい未来」に繋がる処方箋の1つの選択肢となると考えるが、いかがだろうか。その際には、国連やG20に加え、市民・企業・自治体が水平的に参加できる国際協働システムを構築し、国家主権中心から「多層的主権」（国家＋市民＋自治体）への転換を図ることも重要な意義を持つと考える。

また、経済活動の成果を「他者や地球への貢献」と結びつける仕組みとして、基軸通貨米ドル時代の終焉を視野に、炭素通貨や地球環境通貨の提言も有効であろう。これにより「利己」と「利他」の一致を制度的に保証するシステム構築も期待できる。加えて、世界的な基本所得（Global Basic Income）構想も面白い。炭素税・AI税・金融取引税などのグローバルな連帯税を財源に、最低限の生活保障を全人類で共有し、「誰も取り残さない世界」を担保する仕組みも提案できよう。

この提言は、日本がすべきである。なぜなら、米中対立で混迷する米国でも中国でもなく、ウクライナで疲弊している欧州やロシアでもなく、日本こそが、世界に向けて、こうした「人類の明るい未来」に繋がる処方箋を提言し、率先垂範して、体現する価値は大きいと考えているからである。

(end of documents)

⁶ 古屋力（2023）『「炭素通貨」は、気候危機と資本主義の共通解となりうるのか』、古屋力（2021）『東アジア脱炭素共同体構想の歴史的意義と必然性』、古屋力（2019）『東アジア脱炭素経済共同体構想の意義とその実現可能性について—東アジア地域における炭素通貨と再生可能エネルギーを軸とした「協働型コモンズ」構築の必然性と可能性についての一考察—』、古屋力（2017）『東アジアエネルギー共同体の意義』（アジア研究所平成26・27年研究プロジェクト「東アジア地域における環境エネルギー政策共同体の可能性に関する考察」）